

兵庫県こころのケアセンター 平成20年度実施分に係る  
外部評価委員会 業績評価（個別事業評価）

評価対象事業	評価	所 見
研修事業	S	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本センターを中心とする活動により、「こころのケア」や「業務として関わる人への支援」の必要性についての理解が浸透してきている。その結果、高まってきた優れた研修へのニーズに本センターでは、よく応えている。</li> <li>・受講ニーズを踏まえた「こころのケア」に関する研修を行い、定員を上回る受講者数、受講者からの高い評価、県外受講者の増加と、研修事業は高く評価できる。</li> <li>・ただし、専門研修にはセンターの研究員の関わりが深く、過重負担とならないように、外部の専門家と協力する体制を充実するような取り組みも必要と考えられる。</li> </ul>
情報の収集 発信・普及 啓発事業	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンポジウムは、内容豊富で充実している。参加者からも好評を博しており評価できる。今後は、参加者の興味を引く新たなテーマの開発が望まれる。</li> <li>・この事業では、ホームページの果たす役割が重要であり、PFA（心理的応急処置マニュアル）の邦訳など、こころのケアの世界的動向に関する論文・資料を掲載するとともに、市民にもわかりやすい情報提供を行っている。そのことがホームページへのアクセス件数の著しい増加となったと思われる。ただし、今後、内容面での更なる充実のための検討も必要である。</li> </ul>
連携・交流 事業	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事件事故や災害時の支援に関する体制整備の助言後、後方教育支援は貴重であり、本センターは実績を積んでいる。また、海外支援においては、JICAとの連携による四川大地震への支援が、今後5年間継続され、本センターの重要な仕事となり、これをもとに海外での災害連携支援モデルの典型になると良いと思う。</li> <li>・地域支援事業は、大きな災害が発生すると、支援には数年を要することになるので、どのような災害にどのように取り組むのか、指針を決めてもいいのではないかと。</li> <li>・コンサルテーションでは、連携・交流などの場合、個々の専門家とコラボレーションするスキルを獲得していないと、今以上に多忙となり、バーンアウトしてしまう危険性があるので、コンサルテーションモデル又はコラボレーションモデルを構築する必要があると思う。</li> <li>・各種会議の開催を通じて関係機関相互の情報交換が行われており、高く評価できる。今後は、NGO、NPOなどの民間団体との交流も望まれる。</li> </ul>
相談事業	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談件数は、前年度に比べ増加しており、評価できる。また、土曜開館により学生・勤労者等の相談者にも相談の便宜・利便性が図られ、有意義なものと思われる。さらに、ケースカンファレンスやインテーク会議が開催され、ケースの問題点を共有しながら、専門的な判断・対応をしており、評価できる。</li> <li>・ただし、相談内容がDVや性被害が増加しているため、附属診療所や医療機関とのタイアップはされているが、被害者相談など独自のものを作り、相談業務範囲の拡大を図ることができればと思う。</li> <li>・また、本センターとしては、よくやっていると思うが、社会全体から見るとトラウマによる精神的なダメージへのケアに関しては、「専門家が足りない現状」がより明らかになってきていると思う。これに対して何らかの対応ができないのだろうか。</li> </ul>

<p>附属診療所の運営</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土曜診療によって、学生・勤労者の受診機会が広がっている意義は大きい。また、20年度から利用が始まったセカンドオピニオンは、貴重なサービスで、今後、一層の広報周知により、利用が広がることが期待される。</li> <li>・トラウマ関連疾患の専門的治療を行う施設がほとんどない中で、トラウマ・PTSDの専門機関として、少ない専任スタッフで多くの患者の診察を行っており、大いに役割を果たしていると評価できる。</li> <li>・しかし、治療時間が長くしかも長期にわたる困難ケースを扱っているだけに、治療者として研究者としてどのように二つの役割を配分してゆくかが問われるところで、本センター全体として、診療所の位置づけを確認・再考する必要があるのではないかと考えられる。</li> <li>・また、PTSDの専門機関として医療を行う場合は、保険診療での採算が困難であり、努力では解決しない。その問題点等を分析し、発言・提言も行ってほしい。</li> <li>・加えて、本センターの診療所としては、かなり努力しているが、社会的な期待に応えるためには、さらに人的・財政的な強化が必要ではないかと思われる。</li> </ul>
<p>ヒューマンケアアカレジ事業（音楽療法士養成講座）</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒューマンケアアカレジ事業の一環として、音楽療法士養成講座を実施しているが、県が認定する音楽療法士は全国的にも珍しく、音楽療法士の養成と認定及び音楽療法の新規導入施設の開拓により、音楽療法の普及と人材の施設への貢献をめざしており、ユニークな事業であり、高齢者ケアを含め音楽療法のが国の今後の展開に、大きな貢献をするものと考えられる。</li> <li>・しかしながら、なぜ音楽療法なのかという点では、音楽の素養とセンスを持ち、治療法として活用できる能力があるかという点で、認定できる人数が限定され、認定目標数に達しないということも起こりえる。音楽療法に特化しすぎて、広く人材を集め難いのかかもしれないし、逆に高い専門性を求めない講座になってしまうかもしれないというジレンマを感じる。</li> </ul>
<p>ヒューマンケアアカレジ事業（実践普及講座）</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヒューマンケア実践講座は、ターミナルケアや高齢者の生き方などの講座を企画し、アンケートによってもニーズの高さと講師の質の高さがうかがえ、応募者も多く、参加者の満足度も高く、評価できる。ただし、受講者の評価も高いが「リピーター」も多いことが予想され、内容について普段の改善努力が期待される。</li> <li>・できれば、講座が、受講者を通じて受講者以外の一般県民の健康福祉の向上にどのように貢献しているのか、事業開始から10年がたつので、検証するのはいかがか。</li> </ul>
<p>センター業務運営の効率化</p>	<p>S</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿泊室の利用は、内部努力により稼働率が2倍に高まり、また、診療所の利用は、教育委員会との提携により高まったことなど余剰金の発生という形で改善されたことは評価できる。一方、職員の過重負担への対応について、もう少し具体的な方策があっても良いと思われる。</li> </ul>

(基準)

S：年度計画を大きく上回り、中期計画を十分達し得る優れた業績を上げている。

A：年度計画どおり、中期計画を十分達し得る可能性が高い。

B：年度計画どおりといえない面もあるが、工夫若しくは努力によって中期計画を達成し得る。

F：年度計画を大きく下回っている。又は中期計画を達成し得ない可能性がある。